

6. 図の説明

飼育を始める前の蝶友や先輩の談では、キシマミドリシジミはフ化から羽化迄の過程が全ったくならだと山谷のない状態が続くように聞かされていましたが、フ化、蛹化、羽化の各状況共に表を見て頂ければ良く分るように5日～6日の大きな山を中心に放物線に似た状況を描いていることから、やはり冷蔵庫が原因してだらだら状態のフ化因を作るのではないと思われる。

(KAORU SASAKI) 〒678 相生市

12月に見かけた蝶数種について

広畑政己

30年以上に1回起こるような気象現象を異常気象と言うようであるが、今冬(1978～1979年)はまさしくこの異常気象である。朝日新聞(1978年2月23日)によると、今冬(12月～2月14日)の西日本の平均気温は7.2℃で、明治28年以來の平均気温(5.3℃)より1.9℃高く、气象台始まって以來の暖冬となっている。

因みに、姫路市に於ける12月1日～12月17日までの気温を見ると、平均気温8.2℃、最高平均気温14.3℃、最低平均気温2.6℃と高く、この現象は秋から続いている。

この異常気象にリズムを乱されたのか、12月16日に姫路市新畑にてウラナミシジミ2♀を目撃、また12月17日には姫路市打越にてモンシロチョウ1頭とモンキチョウ1頭を目撃した。

ウラナミシジミはインゲンマメ等が11月頃まで栽培されていた上に、暖かい日が続いたので、12月にも発生したものと思われるが、その後0℃以下の日も増え、マメ科食物の花も見られないことから越冬はしないものと考えられる。

モンシロチョウは通常蛹で越冬しているが、この場合は越冬するはずの蛹(休眠の浅い蛹)が、高温によって羽化したものと思われる。

この度目撃したもう1種のモンキチョウについては、川副、若林(1976)によると、本州では中令幼虫で越冬し、九州南部、南西諸島では冬でも成虫や卵が見られることが記されている。

このように、温度が高い地域に於ては、特に定まった越冬形態というものはないようで、姫路市に於ても今年は前述した通りの暖冬で、通常ならば越冬する幼虫が、11月下旬～12月上旬に蛹化し、12月に羽化した

ものと思われる。ともかく前記3種についても、兵庫県下に於ける発生の遅い記録として報告する。

参考文献

川副昭人・若林守男(1976)原色日本蝶類図鑑、
保育社(大阪)

ヤナギを食べたモンキアゲハ

佐々木薫

1977年の6月、庭に鉢植していたカラスザンショウに、モンキアゲハが盛んに産卵しているのを目撃した。

このモンキアゲハは聊かあわて屋さんで、最初は食樹の葉に産卵していたが、そのうち食樹の幹や植木鉢にまで産卵し、果てには私が池の中に、木箱に土を入れ植えていたヤナギにまで2卵産み付けて行った。

その時私は、まさかモンキアゲハがヤナギを食べるとは思ってもいなかったし、異常産卵でおろうとそのことはすっかり忘れていた。

ところが7月の或夕方のこと、庭木に水をやっていて私は、ふとヤナギの葉に蝶の幼虫がいることに気がつき、よく見るとモンキアゲハの3令幼虫が2頭ヤナギを食べて元気に育っているではありませんか。

私は早速このことを蝶友に伝えたところ、皆は一様にこの珍事にびっくりし、私も是非羽化するまで突き止めたいと毎日幼虫の生長を楽しみにしていた。

ところが或日のこと、ヤナギの地面近くの葉に降りていた幼虫が、カエルに食べられ、3令まで生育したものの、この年は念願の羽化までには至らなかった。

1978年は庭を訪れるモンキアゲハも少なく、他からモンキアゲハの雌を採集して来て、カラスザンショウで採卵し、瓶挿しのヤナギで飼育した。

8月29日にフ化した幼虫は、体長が約3.5%であったが、翌日には4.5%になり、ヤナギの葉を2%角位づつ食べては次に移り、一枚の葉に大体4ヶ所から6ヶ所位の食痕を残していた。

8月31日には6%に、9月1日には7%に成長していたが、1日留守をすることがあり、その間の食樹の管理が悪かったためか幼虫は残念ながら全部死んでしまい、今年も羽化を見ることができなかったが、これらの実験で、モンキアゲハがヤナギの1種(コリヤナギと思われる)を食べることだけは実証できたので報告しておきます。